

近代日本における国民高等学校運動の系譜（五）

Ⅳ 加藤完治（中）

——日本国民高等学校運動の展開——

宇野 豪

（受付 1999 年 5 月 18 日）

はじめに

前稿（上）において、加藤完治がいかなる経緯によって山形県立自治講習所長に就任することになったのか、そしていかなる経過と苦闘を経て彼独特の教育理念と実践形態を創出し、さらに確立するに至ったか、を中心に考察した。加えて、その加藤の同講習所における実践が地域社会とりわけ山形県下にどのような効果をもたらすことができたのか、質的に評価することはさておき、少なくとも量的にはどの程度の貢献をなしたのか、等について若干の考察を行ったのである。

ところで、すでにみてきたようにこの自治講習所は、もともと藤井武（当時の山形県地方課長兼官房主事）の献策にもとづいて創設されたものであった。その目的は地方自治振興のための人材育成すなわち農村の中堅的人物の育成に主眼が置かれていた。この藤井の構想は、一面において当時内務省の主導のもとに進められつつあった地方改良事業の流れに沿ったものではあるが、他面においてその発想は、当時漸くわが国に紹介されつつあったデンマークの国民高等学校運動から重要な示唆を得ていたのであった。その意味において、この自治講習所の発足は日本における国民高等学校運動の嚆矢とみられているのである。しかしながら、この自治講習所の初代所長として就任した加藤完治がその独特の信念にもとづき、全身全霊の努力を傾注し、しかも講習生たちと「一心同体」ともいうべき所謂師弟共働の実践のなかで次第に確立して行ったものは、その教育実践の形式において

も理念においても藤井が描いていたものとは大きな相違があったのである。加藤の親しい友人かつ協力者のひとりであった下平権一は、後年この間の事情を評して「藤井が自治講習所を開設した目的、農村に中堅人物のいないことを嘆き、町村吏員の養成が目的だったが、加藤が赴任したため、文字どおり農民道場となってしまった。」（下平著『石黒忠篤』、昭和37）と語っているが、そこには加藤によって実践化され確立されていった自治講習所における教育運動、ひいてはその後の日本における国民高等学校運動の基本的性格がいみじくも看破されているように思われるのである。また、すでに拙論の「系譜（三）」において藤井武に関する資料として紹介した、山形県立自治講習所遺跡保存会によって1967（昭和42）年に建立された記念碑の碑文にも、ほぼ同様のことが述べられている。すなわち、「市町村中堅職員の養成を目的とした山形県立自治講習所は（中略）大正四年十一月この地に開所した」「初代所長加藤完治は単なる知識技能の教育にあきたらず 開墾を体した勤労教育による農民魂を鼓吹し 人材養成に偉大な功績をのこした」と。

以上は前稿を振り返り、加藤完治が日本の国民高等学校運動の発足において果たした役割について一言したのであるが、それは主として山形県地方を舞台とした実践活動であり、運動にかかわる考察であった。それは全国にさきがけ他の道府県への範として効果をもたらしたのみでなく、この講習所には少数とはいえ他府県からの受講生もあったのであり、その意味でも広く全国に影響を及ぼしつつあったとみられるであろう。しかし彼はやがて名実ともに日本の国民高等学校運動の指導者として活動することとなった。すなわち所謂日本国民高等学校長として、首都に近い場所に本拠をおいてその活動を展開することになるのである。いうまでもなくその土台となったものは自治講習所における十年の苦闘の成果である。本稿は、先ずその発展的転進の経緯から考察を始めることとしたい。

1. 日本国民高等学校運動への躍進

（1）加藤の第一回ヨーロッパ視察と、その前後

（ヨーロッパ視察の勧告と決意）

加藤完治は1922（大正11）年9月29日に横浜港を出帆してヨーロッパ視察の旅に出た。そして1年余りの間に、フランス、ドイツ、デンマーク、イギリスの国々を視察して、翌々年1月に帰国した。自ら「洋行嫌い」をもって任ずる彼が1年以上にもわたってヨーロッパに滞在することになったのにはある事情があった。彼が後年『渡欧雑感』（1933年）の「自序」で語っているところによると、当時彼は講習所長就任以来8年間「余り心身を虐待し過ぎたので胃腸病に取付かれ、之がこちれて烈しい下痢に悩まされ」ていたのである。彼は1920（大正9）年9月以来、北村山郡大高根村の軍馬補充部跡地に入り、生徒の先頭に立って開墾に精根を傾けていた。それは彼の、農業労働こそが農民魂の根本を養うという信念にもとづいた実践に外ならなかったのである。しかしそのために彼の健康は著しく悪化しつつあった。そこで彼の健康を心配する周囲の人々とりわけ親友、先輩、教え子たちが加藤を暫く静養させるための手段として考えた外遊であった。この外遊を最も熱心に勧めかつ準備したのは当時の農商務省農政課長石黒忠篤であった。石黒が加藤と肝胆相照らす親友となった経緯についてここで触れることは避けるが、加藤に対する石黒の支援は単なる個人的な親友関係からのみではなく、日本の農村問題の解決に対する加藤の強烈かつ純粋な情熱と常人の真似ることのできない実践力に対する敬愛と信頼と、そして将来に対する期待が込められていたものと思われる。この辺の事情は前掲『渡欧雑感』の加藤の「自序」によっても窺えるが、より詳しくは日本農業研究所編『石黒忠篤伝』（岩波書店、昭和44）によって知ることができるのである。

(滞在と視察の経過)

このようにして、加藤の最初のヨーロッパ視察はそれを用意した周囲の人々の意図するところは彼の病氣療養にあったが、しかし彼自身はヨーロッパで悠々とし静養に甘んじていたわけではなかった。体力の回復に努めたことはいうまでもないが、彼の関心は絶えずそれぞれの国の農業や農村・農民、そして農民教育の実情や問題を知ることに向けられたのである。それは単なる知的興味からではなく、彼が自ら直面していた実践的課題の解決の緒を見出だそうとする探求心の現れともいうべきであろう。彼は1か月余の船旅の後マルセイユに到着、リオンを経てパリに入り、ここで2週間余り滞在する。ここで15日間のフランス語学習の後、ドイツに移動。ベルリンでは留学中の親友橋本伝左衛門の案内で、高等農学校にホルマン教授を訪ね、またリッテル博士を訪ねて農民教育について熱心な意見交換をしている。そしてこの年の12月下旬にデンマークに入った。デンマークでは体力回復のためしばらくコペンハーゲンに滞在、2月初旬ロスキレに移り、それから4月初旬まで約2か月間ここに滞在してロスキレ国民高等学校の観察を中心にしながら、他の国民高等学校や校長を訪ねて意見交換をした。しかし彼が最も意気投合し共感を抱いたのはオーデンセ小農学校長ヤコブ・ランゲであった。そして彼は、現在のデンマーク国民高等学校教育はその普及とは裏腹に、かつての伝統が失われつつあるという印象を抱いたのではなかろうか。

4月7日、彼はデンマークを発ってドイツに向かった。ドイツでは再び橋本氏の案内で様々な施設や団体を視察している。とくに各種の信用組合や小規模の園芸や家畜の経営者及びその協同組合に対して強い関心を向けて視察している。さらに彼は10月中旬からイギリスに渡り、イングランド地方からスコットランド地方へと実に精力的に各地を歩いて農村や農場、農産物の加工や市場の状況などを視察している。彼の視察はただ見るだけではなく、微に入り細を穿って質問したのである。また農村では学校や教会などの施設についても観察することを忘れなかった。そして彼は日本の農

村と比較しつつその実情を捕らえたのである。その他彼は、イギリスにおいても著名な農村・農業研究家を訪ねて意見を交換している。このような視察の経過を細かく報告することは彼の『渡欧雑感』に任せるとして、ともかく彼は次第に健康を回復して、豊かな視察の成果を収めて約1年3か月の旅を終え、1924（大正13）年1月21日に無事帰国したのであった。

（帰国後・拓殖活動への着手）

加藤が帰国したのは関東大震災の4か月後であった。その惨害がなお生々しく、彼は「東京や横浜の変り果てた有様は涙なしには見られなかつた」のである。そのようななかで彼は、「愚図々々して居る訳にも参らず」と行動を開始した。彼が講習所の経営の傍ら早速着手したのは農村青年のための拓殖開発の事業であった。彼は帰国した年の5月に、橋本伝左衛門、下平権一、那須皓、さらに講習所卒業生に呼びかけ朝鮮開発協会を発足させ、自らその常務理事となり、現地の調査にかけまわり、翌年3月には全羅北道群山に青年を送り出したのである。彼の殖民事業に対する情熱はその後ますます高まり、やがて満蒙開拓へと広げられることとなったのである。そして同時に、彼のこの殖民事業への傾倒は講習所教育そのものに対する彼の信念ないし課題にも新たな内容を加える必要が生じたのである。彼は帰国した年の夏、ある講演で次のように語っている。「農村の改良といつても其根本は確固たる信念を有する人に在る」から「明確なる人生観を青年の心裡に植付けることが第一義である」と考えて10年間の講習所教育に携わってきたのであるが、いまや「唯活々した青年に信仰を与へるだけでなく、それと同時に其信仰を実現せしむる道を彼等に備へてやることが肝要だと考へ」、「今回朝鮮に渡り、更に満蒙の奥地へ進んで、其道を開くことにして帰つたのである」（加藤完治「農村問題解決の鍵鑰」『斯民』第十九編第十一号所収、大正13年11月）と。彼は後年「植民問題を離れて、現代の日本に於て教育は徹底できない。」（加藤『日本農村教育』、昭和九年）と云っているが、それはすでにこのときにみられるのである。

なぜ加藤はこのような拓殖事業を講習所教育の一環として考えるようになったのだろうか。その最初のそして最も深刻な衝撃となったものは講習所の教え子から打ち明けられた農村青年の悩みであった。後年彼の語っている所によれば、渡欧直前の卒業式の日、4人の卒業生が彼を訪ね、自分達は「日本農民として立ちたい」が、「小作人の子供で」、「耕す土地」もなく、「家から資金を貰ふことも出来ませぬ。」と、泣きながら訴えた。彼はこの4人に対して「僕が帰る迄兎に角僕の家に住らせよう」と言って彼の留守中彼の家に置くことにして出発したが、「西洋を歩き廻つて居る間此の四人の生徒の為に殖民問題を考へ続けた」(同前)という。彼にとってまさに「殖民は教育の延長」(同前)となつていったのである。農村青年の深刻な訴えと共に、在欧中彼の脳裏を絶えず支配していたものは日本農業・農民の問題であった。さきに概観したように彼は滞在したそれぞれの国や地方で農村や農業の実態を視察し、また識者を訪ねて疑問を質し、意見の交換をしたのであった。そして如何にして日本のそれを改善するかを考えたのである。その結果、農業の最も基礎であり基本ともいふべき耕地面積に関し、彼は「英吉利及亜米利加を見て私はつくづく是は地球上に於ける土地の分配が悪い。土地は神が人類に与へられたものである。其土地を独占して居る国があるから、一方に於ては饑えこゝえて居る所の人がある。是は、どうしても世界に向つて土地解放の大運動をやらなければならぬ。さう云う風な肚が決つた。」(同前)という。こうして彼は帰国後「三四ヶ月授業をして直ぐ朝鮮から満洲、内蒙古の奥まで」行って、日本の青年を殖民させる場所を探し歩いたのである。朝鮮開発協会の設立はその直後のことと推測される。なお、この最初の群山移民に至る加藤の東奔西走の経緯は、小山寛二著『荒野の父 加藤完治』(大日本雄弁会講談社、昭和16)に興味深く語られている。

以上のように、加藤は拓殖を教育の延長と考えるようになったが、それはおのずから従来の講習所教育に対して拓殖教育を追加結合させることにもなったのである。その当時彼が雑誌『斯民』に寄せた小論「国民高等学

校に就いて」の中で、彼は、今後の日本の国民高等学校の教育は農村青年ことに二三男に関しては殖民教育を抜きにしては考えられないと強く訴えているが（同誌第二十編第四号，大正14年4月），まさに加藤は帰国の翌年（大正14年）最上郡萩野村の軍馬補充部跡地100町歩を借受け，此处で拓殖講習会を開催し，さらに同村の原野60町歩の払下げをうけて，開墾を開始しているのである。（渡辺信三「村づくり人材養成の先駆——山形県立自治講習所の教育——」，他参照）

（2）日本国民高等学校の設立

（日本国民高等学校協会の設立）

小平権一がその著『石黒忠篤』（時事通信社・昭和37年）のなかで語っているところによると，日本国民高等学校の設立を最初に呼びかけたのは当時農林省農務局長石黒忠篤であったという。石黒はかねてから「農村における中堅人物の養成に熱心」で，かの那須皓の訳書『国民高等学校と農民文明』に刺激されて，日本にもデンマークのような国民高等学校をつくりたいと考え，懇意な友人たちに相談をもちかけた。その「相談相手は加藤をはじめ，那須皓，橋本伝左衛門，小平権一の面々だった」。そして石黒の意向は「官立ではいけない，あくまでも私立のものにする必要がある。」ということであった。こうして熱心な討議の結果「社団法人日本国民高等学校協会」の設立案が作られ，申請の結果，1925（大正14）年12月22日に認可された。

申請書は設立の趣旨を「農村青年ヲ訓育シ農村ノ振興農民文明ノ建設ニ努力スルカ為ニ」，「国民高等学校ヲ設立シ之ヲ中心トシテ我国農家ノ精神的及物質的開発ニカムルコト極メテ緊要ナルヲ認メ」「同志相計リ之カ為ニ公益社団法人ヲ設立セムトス」（同書，87頁）と述べている。この法人は，寄付金により賛助する名誉会員，発起者その他やや高額の年会費を出資する特別会員，及び趣旨に賛同して通常の会費を出資する正会員の3種の会員から構成されることになっており，学校の設立に関しては篤志の名誉会

員の寄付に仰ぎ、その保管出納は発起者たちによって組織される経理委員が責任を持つこととされている。そして「学校及農場一切ニ附キ加藤農学士ヲシテ充分自由ナル経営ヲ行ハシムルコトトセムトス」と定め、すでに加藤が校長に就任することが予定されているのである。設立発起人としては石黒忠篤、橋本伝左衛門、那須皓、山崎延吉、小出満二、小平権一の名が連ねられ、加藤の名はそこにはない。これは恐らく加藤のヨーロッパ視察中に石黒が計画を進めていたことによるものであろう。さきに紹介した『石黒忠篤伝』によれば、「石黒が加藤を欧米巡遊に旅立たせた裏には」、単に加藤の健康を慮ったのみでなく、「もっとスケールの大きい『日本国民高等学校』の設立計画があったからだ」（同書、75頁）という。なお、「学校建設予定地ハ茨城県友部駅附近元農商務省友部種羊場跡トス」とされているが、申請書に添付された「日本国民高等学校設立趣意書」（同書、91～94）によれば、すでにその種羊場跡地は購入または賃借の目安がついていたようである。この辺の事情について前掲『石黒忠篤伝』にはかなり具体的に語られている（同前）。また、この学校設立にとって条件整備のための資金の調達が重要であることは云うまでもない。ところが資金に関してもその設立基本金とみられる「金参万円」の調達が、設立申請の時点と推測される同年9月15日付で約束されているのである。それは「趣意書」の末尾に付けられている次ぎの「請書」（小平『石黒忠篤』、94頁）によって窺うことができる。

請 書

社団法人日本国民高等学校協会設立ニ要スル費用トシテ金参万円也ヲ右法人へ寄附ノコト正ニ引受申シ候ニ付右請書如件候也

東京市麻布区台町三十一番地

井 上 準之助 印

東京市牛込区揚場町十七番地

石 黒 忠 篤 印

大正十四年九月十五日

社団法人日本国民高等学校協会

設立者

小 平 権 一 殿

那 須 皓 殿

当時の日銀総裁井上準之助が個人としてこの学校設立に寄付したのは、その趣旨に賛同したからには違いないが、やはり石黒との人脈によるものと思われる。

しかしそれに劣らず重要な課題はこの学校の教育と経営の責任を任すことのできる中心人物である。その点について、この「趣意書」は加藤完治という人物に全面的な信頼をおいている。そして山形県立自治講習所における10年の試行と思索と苦闘のなかで確かめ蓄積してきた貴重な経験を、全国の農村青年のために役立て、さらに一步の前進をしてほしいという、石黒や他の発起人たちの期待と願いが、そこには込められているのである。

たしかに小平が云っているように、この日本国民高等学校設立の発想はかの『国民高等学校と農民文明』にヒントを得たことも事実であろうが、その具体的な日本的形態をイメージさせ、しかもその実現可能性を実証してくれたのは、むしろ加藤の自治講習所における実践ではなかったか。なお第一次世界大戦が終わった頃から、デンマークの農業の発展と同国の国民高等学校に関する視察報告などが次第にわが国内に増えつつあったことも事実であり（拙著『近代日本における国民高等学校運動の生成過程』・下、1992年参照）、そのような時代の影響も無視できないであろう。それは兎も角として、この「趣意書」の後半はほとんど加藤の山形における勝れた実践の紹介に終始している。それだけに加藤に対する石黒たちの信頼と期待が強く、またその非凡の才能と力量を新しい舞台で発揮してほしいという

願いがあったのであろう。

(加藤の提言——日本国民高等学校論)

上にみてきたように日本国民高等学校協会の設立は、当時の農務官僚石黒忠篤の発案に直接的な端緒があった。そしてその発想を動機づけ、かつその内容の具体的なモデルを提供したのは、加藤の山形県における実践の成果であった。そしてまたその時代的背景として当時の農村問題の深刻化、さらに流布されたデンマーク、就中国民高等学校情報等のあったことも少なからず影響したことと思われる。しかし、より直接的に石黒の発想に影響を与えたものに、ヨーロッパ視察を終えて帰国した加藤の新しい提言があったことを見落としてはならないと考える。

既述のように、加藤は最初のヨーロッパ視察を終えて1924（大正13）年1月に帰国したが、その翌年雑誌『斯民』に「国民高等学校に就て」（第二十編第四号，大正14年4月発行）という小論を寄稿している。

彼はヨーロッパ諸国視察中3か月余デンマークに滞在していたが、その間、ロスキレ国民高等学校に約2か月逗留し、直接学校を観察するだけでなく、同校の校長その他の国民高等学校の関係者等とも意見交換の機会をもった。また、当時のデンマークの国民高等学校を批判し自らの信念にもとづいて独自の教育を実践しつつあったオーデンセ小農学校長ヤコブ・ランゲ氏と会い、彼の国民高等学校批判を聞くなどしているのである。そのような体験や見聞は、彼のデンマーク国民高等学校の現実を認識するために極めて有益であったに違いない。それと同時に、これまで自ら精根を傾けて実践し確立してきた自治講習所教育のあり方に一層強い確信を得たように見えるのである。そして彼が健康を回復して帰国したとき、彼の見識に進境がもたらされ、新しく広い客観的視野が与えられたのではないであらうか。

その小論の冒頭で彼は、「農村問題の擡頭と共に我邦でも国民高等学校建設の機運が勃興して来た」が、「是を如何に建設し、如何に経営すべきかは

誠に重大なる問題」であり、そのために「国民高等学校の建設に当つて」「丁抹の国民高等学校を如何に考へ、如何なる点を採用すべきか」について所信の一端を披瀝したいといっている。察するに、当時（第一次大戦後から）相次いで為されていたデンマークの国民高等学校の紹介は、その多くが彼にとっては納得しがたいものであり、従つて、そのような紹介が無批判に受入れられることに危惧を抱いていたのである。彼にとって「自治講習所は大和魂の磨き合ひをする学校」であり、「丁抹の国民高等学校も矢張り同様で、世界のどこに出しても恥かしくない丁抹魂を生徒及び職員が磨き合ひをする学校」である。要するに、「国民高等学校なるものは特に其校長がさういふ信仰の立場に居て、知識や其他の訓練は第二として、全力を挙げて校長が自分の持つて居る信仰を生徒に烙き込む所の学校である。」（同書、45頁）

これは国民高等学校なるものに対する彼の理解であり信念とも云うべきものである。彼はその信念の根拠を説明するために、その発祥の地丁抹の国民高等学校とはそもそもいかなるものであったかについて、「彼地の国民高等学校の校長や識者と意見を交換したところと、私の初めから信じて居つたところとを纏め」て語ろうとする。詳述することは避けるが、彼はまず、その源流とみられているグルントウィとクリステン・コルにその本質を求め、要するに「国民高等学校とは、其校長が自ら体験して得たところの堅い人生観を生徒に流し込む所である。そして其生徒をして農民なら農民、役人なら役人、軍人なら軍人、商人なら商人、各々其従事する事業に校長から注込まれた精神を発揮せしめるのが、国民高等学校の成立ちである。」（同、49頁）と結論づけている。

しかし彼は、自らの自治講習所における7年の経験を顧みて、現在においては「今まで私のして来たことだけでは徹底しない。それには如何にしても信仰を与へると同時に、其子弟の行くべき道を開いてやらねばならぬ。（中略）然るに丁抹の各国民高等学校の教師は此問題を敬して遠ざけて居る。」（同、50頁）という。そして加藤は、デンマークで特に意気投合した

小農学校長ヤコブ・ランゲ氏の言を引き、デンマークの国民高等学校が花開いたのは当時のデンマーク農村が経済的に豊かであって、「教育と経済との両者が相寄り相扶けて進み、同時に学校の経営に必要な人物が輩出したから」であるという。そこでわが国の現状に関していえば、「私は我現下の農村問題の経済的方面の根本問題は植民にある」とみる。こうして彼は「今後我邦で建設されるべき国民高等学校」について提言するのである。曰く、「先ず一棟の簡単なる校舎を作つてそれに開墾地でもよいから土地を附属せしめ、そこへ先生が来て生徒に対して困難に打克つだけの心身を作るやうに仕込むのが第一だと思ふ。」、さらに「国民高等学校に於ては其根本になる所の心身の陶冶を第一にしなければならぬ。それは国民高等学校の先生は簡単な仕事でもよいから、自分が生徒と一所に働き、生徒に自分の人生観を流し込むと共に、希望のない青年に対しては明瞭なる希望を与へ、其希望の下に将来の活動の根源となる精神と身体とを鍛練せしめねばならぬ。」と。そうして彼は「斯かる見地よりすれば現在の日本に於ては、丁抹に於ける真の国民高等学校は、長男の場合には結構であるが、二三男の場合には物足りない」とも云うのである。ここにはまさに加藤の考える日本独自の国民高等学校のあるべき姿が具体的に描かれているのである。そしてすでに、後に石黒の発案により設立された日本国民高等学校のスケッチが描かれていたようにさえ思われる。事実そのような役割を果たしたことであろう。

彼はさらに、この協会の設立が認可され、理事に就任した直後、雑誌『帝国農会報』（同誌、第十六巻第二号、1926年2月）に「日本国民高等学校に就て」という小論を寄稿している。これは「丁抹の」国民高等学校に対して「日本の」国民高等学校は如何にあるべきかを論じたものであり、基本的には先にみてきた小論「国民高等学校に就て」と変わってはいない。しかし、敢えて「日本」という限定がなされたのはそれなりの意図があったのである。今回の小論において彼は「真の日本魂は、その儘真の丁抹魂であり、真の丁抹魂はその儘真の日本魂である。真の日本魂は時と場所との

如何を問はず世界各国到る所に燦然として光を発する、その日本魂の涵養に努むるのが日本国民高等学校であらねばならぬ。」（同誌、11頁）という。それは「国民高等学校とは、其校長が自ら体験して得たところの堅い人生観を生徒に流し込む所」というかつての表現に比べより一般化された表現であると同時に、「日本魂」——大和魂ではなく——をより強調し、あえてその普遍性乃至国際性を強調しようとする意図がみられるのである。

次に、今回の小論では、丁抹ではなくとくに「日本の」国民高等学校の教育において、その校長以下職員がとくに心得るべき重要な態度や実践目標等について具体的な見解を述べていることが注目される。すなわち「常に先頭に立って生徒と共に農業労働に汗を絞り」、生徒に「農業労働を手伸びむといふ精神」を養うこと（同、13～14頁）、「如何なる境遇に処しても徐々に改善の実を挙げ得る」ような「活きた知識技能を出来得る限り修得せしめる」こと（同、15～16頁）。そして最後に、そのような教育訓練を行うために備えるべき「手段方法」として、第一に「生徒職員ともどもに働き、且つ農場の組織其のものを以て生きた実例にする」こと、さらに丁抹に倣い唱歌、ただし「大和民族の意気を涵養するやうな唱歌」、体操ただし日本古来の武道を加えたい、「苟も日本国民高等学校といふからには、日本魂の發育に力のあつた日本古来の武道はどうしても採らねばならぬ」（同、17～18頁）という。

以上、加藤の小論「日本国民高等学校に就て」を、その前年の小論「国民高等学校に就て」と比較して若干変化乃至付加された点について考察してきた。そこにはまさに創設されようとする新しい「日本国民高等学校」に対する彼の夢と責任が、一般的理念としての日本国民高等学校論とオーバラップしているようにも思われる。この小論の最後に彼が記した次の言葉にもそれが窺えるのである。「今回多くの親友の真心によつて日本国民高等学校が茨城県友部に建設されることゝなつたが、如何なる御縁か自分は同校経営の衝に当らねばならぬこととなった。就いては同校の将来は略、以上に述べた如き心持を以て進みたいと思ふ。併しそれが、うまく行くか

行かないかは理窟ではない。希くは唯だ吾々の為すところを静かに見て戴きたい。

すべての物事の最後の判断は活事実である。

と云ふことを最後に附言して置く。」(同, 19頁)

(3) 日本国民高等学校の開校

(自治講習所長退任とヨーロッパ再視察)

加藤は日本国民高等学校協会の設立が認可された1925(大正14)年12月に同協会の理事に就任し、同月28日付で自治講習所長を退任した。思えば、あの晴天の霹靂にも似た所長就任以来まさに苦節10年の歳月が経過していたのである。因に、加藤の後を承けて同講習所長に就任したのは彼の後輩西垣喜代次である。西垣は同年東大駒場農学部を卒業し、直ちに5月からこの自治講習所に入り加藤の片腕となって萩野の開墾に鋤を振っていた青年である。しかも東大在学中(大正12年初秋)から加藤の人格に触れ、その意気を感じて自ら加藤の下に身を投じてきた人物であった。(協調会編『農村における塾風教育』, 昭和九年刊による)したがって加藤の後継者に相応しい人であり、加藤も安心して同所の将来を託することができたと推察されるのである。

こうして加藤は自治講習所の第10回終了生を送り出した後翌大正15年1月から茨城県友部に赴任し(協調会編・前掲書)、開校の準備に着手したのである。さきに紹介した「日本国民高等学校に就て」という小論は、この頃書かれたものであり、それは単なる彼の国民高等学校論というよりも、むしろ自らの教育方針であり、この学校開設準備の基礎であり出発点でもあったのである。

ところで彼は、この開校準備の真只中ともいうべき時期に、再びヨーロッパ視察の旅に出たのである。しかもこの度は夫婦同伴である。それは彼自ら云うように、「十一歳を頭に四人の子供を皆様の御温情に御任せして両親が一年近くも外国を歩きまはる」という旅であった。そこには「断腸の思

ひ」すらあったのである。にもかかわらず彼は「此の欧州旅行を決行せんと覚悟するに至った」（『滞歐所感』、加藤全集第二卷所収）という。その決断の理由については「皆々様の御考へに一任する」としか云っていないが、決して単なる観光や慰安を目的とするものではなかったであろう。そのことは加藤夫妻のヨーロッパ視察の日程とその報告によって如実に語られている。夫妻は5月26日にマルセーユに到着したが、そこから一度ローマを訪ね就中サン・ピエトロ大聖堂を拝観した後パリーに入る。このイタリア訪問の報告において特に印象的なのは、一つには彼がルターの宗教改革の意義を再確認していること、いま一つは当時ムッソリーニを中心とするファシスト党の指導によって変わりつつあるイタリアの国情に強い関心を示していることである。

しかし彼の関心の中心はやはりデンマークにあったと思われる。6月27日にコペンハーゲンに入り、直ちに先回と同様ロスキレを訪ね、同地の国民高等学校の訪問を皮切りに、オーデンセの小農学校長ヤコブ・ランゲ氏訪問、そしてユトランドに渡りエスビヤに近い小さな農村に約2週間滞在。ここで彼は、かのクリステン・コルの伝統を継承しているという自由学校に毎日通って観察している。そして加藤婦人は同地の編物クニッペルに興味をもち、一婦人の手ほどきで寝食を忘れる程熱心に連日これに集中し、その技を修得したのであった。その意欲と努力には加藤自身教えられたと語っているのである。この技能修得が帰国後日本国民高等学校の教育に役立つとは、当人は考えていなかったであろうが。

その後彼らはユトランドの或る国民高等学校を訪問している。これはかの小農学校長ヤコブ・ランゲの高弟と云われる人が経営する独特の学校であり、彼はこの校長と教育について熱心に意見を交換したのであった。そこからロスキレに向けて帰るが、その途中でヘン小農学校を視察している。ここで多くの人は疑問に思うであろう。それは恐らく当時もデンマークの国民高等学校を代表し、その主峰と目されていたに違いないであろうアスコウ国民高等学校を視察しなかったことである。それは単なる彼の日程の

都合によるものではない。それは彼の関心の中心が農民・農業・農村青年の教育にあったからであろう。その意味ではアスコウは彼の関心の範囲から外れるものであり、むしろ排除乃至無視すべき国民高等学校であったかも知れない。

デンマークにほぼ3か月滞在した加藤夫妻は(9月末頃?)ドイツに移動した。この国でも視察の対象は主として国民高等学校と簡易農学校であった。とりわけドイツの国民高等学校においてドイツ魂の教育が徹底していること、及び職業教育が重視されていること、に強い共感を示していることが注目されるのである。また彼はウィッテンベルヒ大学を訪れ、ルターの遺した膨大な著作に触れていたく感動し、まさに「信仰は力なり」ということを身に沁みて感じたのである。そして宗教改革の偉業にも思いを馳せ「若し吾人にして、同じ理想信仰の下に真に奮闘努力したら、如何なる仕事でもなし遂げ得ると信ずる」(全集第二巻『訪欧所感』, 268頁)という思いを語っているのである。

何れにせよ、ドイツの精神的文化は加藤にとって、デンマークのそれよりも深くかつ強い感動と共感を与えるものであったようである。ドイツの視察を終った加藤夫妻は再びデンマークに戻り、ユトランド及びヒュン島内の特色ある2～3の学校を視察した後、11月14日ベルリンを發ち、シベリヤ鉄道を経由してハルビンに到着、年明けの1月30日に帰国したのであった。このシベリヤの旅もまた彼にとって極めて強い印象を残したようである。すなわち予てから革命後のソビエト・ロシヤの国情を知りたいと思っていた彼にとって甚だ有意義な体験であったことが後日語られている。

最初に述べたように、なぜこの時期に慌ただしく而も夫婦同伴で第二回目のヨーロッパ視察に出たのか、その目的は何であったのか、については彼の口からは語られていないが、しかしこの視察旅行の現実を見ると、そこにおのずから事実をもって語られているのではなかろうか。それはまさに過去10年の自治講習所における試行的実践を踏まえて、日本全国を視野にいたした農村青年の教育を目的とする新しい「日本国民高等学校」を發足

させるために、彼にとって不可欠の準備だったのである。それは一つには、彼の抱く国民高等学校の教育理念なり計画に関する信念の妥当性を、かの源流とされるデンマークそしてその流れを受継ぐドイツにおいて、再確認するという自らのねらいがあったのではなかろうか。彼は旅の報告のなかでしばしば「井底の痴蛙」となることを自他ともに戒めているが、この視察旅行はまさに日本国民高等学校の責任者としてその戒めを自ら実践したものと云えないであろうか。第二に、そのことにも関わるが、今回は単身ではなく美代子夫人をも同伴したのであった。国民高等学校における校長夫人は重要な職員である。そのことはデンマークの国民高等学校において実証されている。夫人といえども「井底の痴蛙」であることは許されない。単に良妻賢母に留まることなく、広い視野と知見を具えた校長夫人であってほしいという期待が、加藤の胸の内に秘められていたのではなかったか。

なお第三に、補足的ともいえるが、先年の視察において果たせなかった国特にドイツの国民高等学校や農民学校、さらにデンマークでもユトランド地方その他の国民高等学校等について、いつか機会あらば自らの目で確認したいという希望もあったと推測される。それも新しい日本国民高等学校長として、痴蛙とならぬために必要なことであつたと思われる。しかも、この視察において最も強い感動を与えたものはドイツ魂であり、ルターの信仰であつた。それによって彼はますます信念を固くし、自らの教育方針に確信をもったのである。

（日本国民高等学校長就任と開校）

日本国民高等学校協会の申請にもとづいて茨城県知事からこの学校設立の認可が下りたのは1926（大正15）年5月19日であつた。言うまでもなく加藤はこのときヨーロッパ視察中であつたが、翌20日付で校長に就任したのである。加藤の留守中開校準備や生徒募集などがどのように進められたのか、詳細にはわからないが、雑誌『帝国農会報』の地方欄の茨城県に関する記事「日本国民高等学校の現況」によれば、「堂々たる校舎や寄宿舎、

職員住宅、農具舎、収納舎、肥料舎其他の工事が、現に七分通り進捗しつゝあり、十二月中旬には完成の筈である」という。また開校予定は「二月一日」で、「本年度の生徒募集は過日発表された」が、それによると「主として農家の長男教育を行ふ第一部について募集を行ふものである」、と報じられている。また「学校長たる加藤完治氏夫妻はデンマーク、スエーデン、ドイツ、ロシヤ等を巡歴して十二月二十五日帰朝、直ちに校務に当たられるとのことである。」とも伝えているのである。(同誌第十六巻第十五号、大正15年12月発行、119頁)

同誌はその翌月「日本国民高等学校の概要」という記事を掲載している。これはほぼ開校準備が完了したことを世に報じたものと思われる。その記事は3つの部分からなっている。すなわち、まず「はじめに」に相当する部分。ここではいわゆる「国民高等学校」なる名称が誤解を招くことなきよう、本校が一般の学校とは異なる独特の教育方針と鍛練方法による「心身鍛練の道場」であることを訴えている。その他入学に必要な心得、費用や持参すべき物品等についても簡単に触れられている。なお、「開校予定は大正十六年一月にして、先づ第一部教育より始め約五十人の入学を許可する見込みなり」と述べているのが注目される。

しかし、この記事の中心となっているのは「日本国民高等学校学則」である。同学則は先ず、第一条において「本校は農村青年子女を訓育して農民たる信念を涵養せしめ天分を明確ならしめ其進路を示し採るべき方針を授け以て農村の発達農民文明の建設に務むるを以て目的とす」と謳い、次いで第二条において、本校の教育組織の中心ともいうべき五部編成について、下記のように規定しているのである。

第一部 (長男教育) にありては年齢満十八歳以上の農家子弟 (主として長男) にして将来農家の戸主として立ち農村の中核たるべき者を養成す

第二部 (次三男教育) にありては年齢満二十歳以上の次男以下の農家

宇野：近代日本における国民高等学校運動の系譜（五）

子弟にして将来拓地植民に従事する者を養成す

（第一部及び第二部に於ては主として冬期間教育を行ひ爾餘の時間は本校農場に於て農業労働に従事せしむることあるべし）

第三部（少年教育）にありては小学校卒業年齢より満十八歳未満の農家子弟に訓育を行ひ農業に関する知識技能を習熟せしむ

第四部（女子教育）にありては年齢満十五歳以上の農家子女に訓育を行ひ将来農家の主婦として必要なる家政及び農業上の知識技能を授く

第五部（短期講習）にありては学校教員其他青年に対し皇国精神発揚に関する講習会等を随時随所に開催す（前掲誌，107頁）

修業期間は、第一部及び第二部は1か年、第三部は2か年、第四部は2か月、そして第五部は其都度学校長が定めることになっている。

それら各部の始業と終業に関しては、第一部及び第二部は1月8日～12月25日、第三部は4月1日～翌々年3月30日、第四部は3月1日～4月30日及び9月1日～10月31日と定められている。

教科及び課程に関しては、別表「教科課程及教授時数（毎週）」として次のように示されている。ただし、それは「大体左記概定表に従ひ明確に各其の要点を会得せしめて活用に資することを力む」ことになっているので、この表は一つの目安とされるものである。

——第一部（長男教育）——			——第二部（次三男教育）——		
教 科 目					
	課 程	時 数		課 程	時 数
修 身	農村経営	6		農村経営	6
地理歴史	一 般	2		一 般	2
国 語	—	1		—	—
数 学	珠 算	—		珠 算	1
農 学	農学綱要	12		農学綱要	10
殖 民	—	—		殖 民	2

広島修大論集 第 40 卷 第 1 号 (人文)

外国語	—	—	初 歩	2
武道	剣 道	4 (10)	剣 道	4 (8)
体操	皇国運動	3	皇国運動	1
家政	—	—	—	—
音楽	—	—	—	—
農場実習	(農場実習時間は時期に依りて一定せざるも各部共最も之に重きを置く)			
視察旅行	(卒業間際に於て内地満鮮等に行ふ)			
計		28		28

備考 本課程は必要に応じ随時変更することあるべし

第三部 (少年教育)

教科目	—— 第一年 ——		—— 第二年 ——	
	課 程	時 数	課 程	時 数
修 身	—	—	農村経営	4
地理歴史	—	—	一 般	2
国 語	購読作文	5	購読作文	3
	習 字		習 字	
数 学	算術代数	4	幾何三角	4
			珠 算	
農 学	農林学大意	13	農林学大意	8
	理科大意		理科大意	
	農学実験		農学実験	
外国語	初 歩	4	初 歩	3
武道	剣 道	1	剣 道	2
体操	皇国運動	1	皇国運動	1
音楽	—	—	一 般	—
農場実習	(第一, 二部と同じ)			
視察旅行				
計		28		28

第四部（女子教育）

教科目

	課 程	時 数
修 身	農村経営	3
地理歴史	一 般	1
農 学	農業綱要	6
武 道	武道講話	1
体 操	皇国運動	2
家 政	料理看護育兒 教育裁縫洗濯 等	14
音 楽	一 般	1
計		28

（前掲誌，108～109頁）

この教科課程は言うまでもなく加藤がヨーロッパに旅立つ前に発表した教育方針「日本国民高等学校について」に基づいて作成されたものであるが、同時にかの山形県立自治講習所における苦節10年の試行錯誤を経て造ってきたものが基礎となっている。第四部女子教育を除けば、細部は別として基本的にはほぼ講習所教育の発展と見てよいであろう。

この「日本国民高等学校概要」の最後に、この学校の設立者である日本国民高等学校協会について紹介されている。その「社団法人・日本国民高等学校協会概要」によれば、「一 本協会は農村の中心人物たるべき者の養成指導を為し依つて農民の精神上及物質上の向上発達並農村の改善を期するを以て其の目的とし、目的達成の為左の事業を行ふ」として、次の4項目が掲げられている。

（前掲誌，109～110頁）

1. 日本国民高等学校を設立し之が経営を為すこと
2. 他の国民高等学校の設立を助成すること
3. 農村に於ける講習，講話，実務指導を為すこと
4. その他本協会の目的達成上総会に於て必要なりと認めたる事業

そこにはこの協会が単に一つの「日本国民高等学校」を経営することをめざすものではなく、これを本拠として全国に同様の学校設立を普及するいわゆる国民高等学校運動を展開しようとする意図が表明されているのである。因に、その翌月即ち1927（昭和2）年2月発行の同誌『帝国農会報』の地方欄には、鳥取県に「山陰国民高等学校設立」の議が東伯自治協会総会において提唱され、倉吉町を中心にその設立計画が進められつつあることが報じられている（同誌、第十七巻第二号、155頁）。

この協会の組織についてみると、まず会員は「本協会の主旨に賛成し、本協会事業を援助する者又は本協会の経営する日本国民高等学校を卒業したる者」とされ、三種に分けられている。即ち、1.正会員 2.特別会員 3.名誉会員である。正会員は定額の会費を納付する会員（主として卒業生）。特別会員は協会の発起者、特別縁故ある者及び資金を寄付して事業を賛助する者（年額30円又は一時金250円以上を寄付）。名誉会員は、資金を寄付し、協会の事業を賛助する者（一時金2500円以上を寄付）。

なお、協会の事務所は、東京府豊多摩郡落合町下落合千三百七十九番地（小平権一方）に置かれている。また、農林省農務局内（渡辺俣治宛）にも連絡先が置かれていた。そこにも理事長石黒忠篤をはじめ支援者たちの加藤に対する好意ある理解が現れているように思われる。それはこの「概要」の締め括りの部分において、多くの人々の理解と協賛を求めた後「資金の保管出納は理事責任を以て之に当り、学校及農場一切に付ては加藤校長の充分自由なる経営を行はしめ、以て目的の達成に進まんことを期す」（同誌、第十七巻第一号、110頁）と、述べてあることにも頷けるであろう。

最後に、この時点（開校時）における同協会の役職員を「概要」によって紹介しておくこととする。

社団法人 日本国民高等学校協会役職員

理 事	（農 林 省 農 務 局 長）	石 黒 忠 篤
同	（帝国大学農学部教授・農学博士）	那 須 皓
同	（産 業 組 合 中 央 金 庫 参 事）	小 平 権 一

宇野：近代日本における国民高等学校運動の系譜（五）

同	(元愛知県立安城農学校長)	山崎延吉
同	(農林省農林技師)	渡辺俣治
同	(元山形県立自治講習所長)	加藤完治
同	(茨城県農林技師)	深作雄太郎
監事	(元大蔵大臣)	井上準之助
同	(京都帝大農学部長・農学博士)	橋本伝左衛門
同	(文部省督学官)	小出満二
校長		加藤完治
常議員	子爵	渋沢栄一
同		安田善次郎
同	(男爵 岩崎久彌代理)	桐島像一
同		西脇濟三郎
同	男爵	住友吉右衛門
同	(貴族院議員・帝国教育会長)	沢柳政太郎
同	(東京帝国大学教授・法学博士)	矢作栄蔵
同	(茨城県内務部長)	大森佳一
同	(文部省普通学務局長)	関谷龍吉
同	(文部省専門学務局長)	武部欽一
同	(東京帝国大学総長)	古在由直
同	(北海道大学教授・農学博士)	高岡熊雄

(同誌, 111頁)

この役職表には明記されていないが石黒忠篤は学校設置が認可された直後に理事長に就任していたのである。そうして本務の傍ら日本国民高等学校の開校準備に奮闘したのである。この錚々たる人物の顔ぶれ、実質上はともかく名目上でさえ協力を得ることはやはり理事長石黒の人物とその力を借りなければ不可能であったと思われる。それほどに彼がこの国民高等学校の設立に意欲をもち期待をかけていたとも言えるのである。またそこには信頼する親友加藤完治に懸ける石黒の期待と配慮の深さが察しられるのである。

とりわけ石黒がこの学校設立から開校前後にかけて最も苦勞したのは資金の調達であった。加藤の親友であり、かつ農務官僚としては石黒の部下であり、しかもこの協会の理事の一人でもあった小平権一の後日談によれ

ば、「新しい学校の経営をどうするか、ことに付属の広大な五十八町歩の農場の経営と農場長の選任、はては資金調達の方法などについて、毎日のように、石黒邸で議論が戦わされ、いつ果てるともない」(小平『石黒忠篤』95頁)状態だったという。また、石黒が農務局長で、その下で小平が農政課長のときのこと。「何としても金が足りない。窮余の一策を案じて、忠篤と小平の連名で、時の日銀総裁井上準之助に二千元の借金を申し込んだ。表玄関から入ったら、当時の二千元という大金を、国民高等学校などに貸すわけがない。もちろん、井上準之助個人の金である。井上は快く、二千元の借金に応じてくれた。」(同書、96頁)という。因に「この金が返済できぬうちに、井上は凶刃に殞てしまった。あとで井上の遺族が、借金を棒引きにしてくれて、証文を返してくれたが、当時の記念として、この証文はいまもなお小平家に大切に保存してある。」(同書、96～97頁)とも語っている。石黒は自ら金の苦勞など何等語ったことがないようであるが、加藤の「充分自由なる経営」(前出)は、石黒をはじめ親友その他の多くの協力者の支援によるものであった。

ともかくもこうして加藤の留守中鋭意開校準備が進められていたのである。さきに紹介した「日本国民高等学校概要」に「開校豫定は大正十六年一月にして、先ず第一部より始め約五十人の入学を許可する見込みなり」(前掲誌、106頁)と記されているように、1927(昭和2)年1月開校の予定であった。しかし、実際には2月1日をもって開校されたのである。それは校長加藤の帰国が1月30日であったためか、それとも諸準備の都合によるものか、その理由は定かでない。

(生徒募集について)

最初の生徒の募集が、何時、如何なる方法で発表され、如何なる機関やルートを通じて全国に公開されたのか等、興味あるところである。1926(大正15)年12月15日発行の雑誌『弥栄』に掲載された「日本国民高等学校学則」によれば、「本校に入学せんとするものは戸主又は後見人連署の上入

学願書に履歴及び戸籍抄本を添え学校長に差出すべし」と規定し、願書及び履歴書の書式を示している。これ自体生徒募集の意味をもっていると思われるが、しかし直接に第一期生の募集は何時行われたのであろうか。さきに紹介した1926年12月発行の『帝国農会報』「地方欄」——茨城——の「日本国民高等学校の現況」という記事は、「本年度の最初の生徒募集は過日発表された」と書き、さらにその「要項」を列記しているなかで「入学願書申込期日本年十一月末日限」とされ、しかも「入学採否」は「十二月中に本人へ通知す」という。そうすると、おそらく同年の10月乃至11月初旬頃にその要項が発表されていたものと推測される。なお、「本年は履歴其他の方法に依ることとし特に入学試験を施行せざる見込」とも云い、また「成るべく紹介者ある方便なり」と、願書申込期日に添えて書いてあることなどから推して、実質上いはば推薦入学的な方法を採用したのかも知れない。後年加藤完治によって著された『日本農村教育』（75版，昭和16年11月刊）に掲載されている日本国民高等学校の「卒業生一覧」によれば，第一年度の卒業生は，第一部25名，第二部18名，計43名となっている。因に，第二年度の卒業生は，第一部46名，第二部18名，第四部10名，計74名である。卒業生数から直ちに入学者数，さらに志願者数を推定することはできないが，おそらく開校時における入学志願者数，ひいては入学生数は予定をかなり下回っていたものと思われる。それは当時の報道機構や情報機関の状況からみてごく当然のことであったであろう。

ところで，どのような機関乃至ルートによってこの学校が報道され，生徒の募集が行われたか，それは一般の新聞によったことはいうまでもないが，上にみてきた資料によってもわかるように，有力なものとしては先ず系統農会の組織であり，次いで自治講習所卒業生の組織即ち一笑会だったのではなかろうか。それらは単に機関誌『帝国農会報』や『弥栄』のみならず，さまざまな手段によって日本国民高等学校に関する情報を世に送ったものと思われる。

（本稿の結びとして）

加藤完治は山形県立自治講習所における苦節10年の実践のなかで試行し確立しつつあった農村青年教育に関する信念と実践方式を、図らずも新しい舞台において、全国の農村から集まった青年を対象にして展開することになった。この新しい展開の契機をつくり、その舞台を用意し、その準備万端を整え、彼の自由自在な活躍を支えてくれたのは、彼を最もよく理解し、彼の将来に期待していた親友や自治講習所の卒業生たち、就中農務官僚石黒忠篤等であった。石黒達が加藤をより大きく羽搏かせるべく用意した舞台は茨城県友部の広大な58町歩の付属農場を有する校地であった。そしてここに一地方の講習所ではなく日本全体を視野にいたした「日本国民高等学校」を設立し、その校長に就任したのであった。

しかも、この舞台の転換は彼のいわゆる「理想信仰」を精神的柱とし、農業労働を重視する師弟共働の教育観において、基本的には変化はなかったといってよい。しかしながら彼の教育観は自治講習所時代から全く変化しなかったわけではない。彼が石黒たちの勧めにより図らずもヨーロッパ視察に出ることになったが、それは彼の確信に一層強い自信をもたせた面もあるが、従来意識のなかになかった新しい課題を自覚させたのではなかったか。彼が第二回目のヨーロッパ視察に旅立つ直前に書いた「日本国民高等学校に就いて」は、まさに彼の新しい教育理念の表明であった。それはまた、まさに「日本的な」国民高等学校の理念の表明であった。彼は、日本的なものは世界的でもある、としばしば信念を吐露しているが、そこには何等問題はなかったのであろうか。そういった彼の思想・信念そして教育論に対する批判的考察は、今後に残された筆者の課題である。

ともかくも1927（昭和2）年2月1日をもって新しい日本国民高等学校は発足したのである。これはいうまでもなく近代日本における国民高等学校運動展開への極めて大きな躍進の第一歩であった。

（1999年5月17日）

（追記）この稿を作成するに当たって、今回もまた貴重な資料、とくに現在原初のもものがほとんど逸失されている『弥栄』誌の資料を提供していただいた山形市在住の郷土史研究家渡辺信三氏の温かいご協力に対し深く感謝申し上げます。

Summary

The Line of the Folk High School Movement in Japan (5)

Tsuyoshi Uno

IV Kanji Katō (Part 2)

Prologue

1. The Start of Nippon-Kokumin-kōtōgakkō (Japan Folk High School).
 - (1) The Europe visiting by Katō, and other.
 - ① The details of that he started toward Europe.
 - ② The visiting course by Katō in Europe.
 - ③ His return from Europe and starting to the colonizing.
 - (2) The foundation of Nippon-Kokumin-kōtōgakkō.
 - ① The foundation of Nippon-Kokumin-kōtōgakkō Corporation.
 - ② The opinion of Japanese folk high school by Katō.
 - (3) The opening of Nippon-Kokumin-kōtōgakkō.
 - ① The retirement from Jichikō shusho Master, and The Europe visiting by Katō for the second time.
 - ② The inauguration to Nippon-Kokumin-kōtōgakkō Master by Katō, and opening of the school.
 - ③ to recruit the student body.

Epilogue